

二つの市立病院統合で地域医療再生を目指す地域中核病院



2階まで吹き抜けのホスピタルモール

広く長いモールは開放感にあふれ、市民の交流の場となればという病院側の意図が現実になりつつある。市民参加の病院ボランティアも登録者100名を数える。右の写真は、2階の通路を利用したギャラリー「絵画の小径」や図書・情報コーナー

スムーズに進展する体制整備

「掛川市・袋井市病院企業団立 中東遠総合医療センター」（名倉英一企業長兼院長・500床）は、静岡県掛川市（人口約11.8万人）の掛川市立総合病院と袋井市（約8.7万人）の袋井市立袋井市民病院が統合し、昨年5月1日、両病院のほぼ中間的位置に新病院として開院した。統合の大きな理由は、それぞれの市立病院の建物の老朽化による建て替えの必要性が生じていたのと、内科系医師の不足に対する医師確保対策が急がれていたことであった。

この対策を軸に、それぞれの市立病院のあり方に関する検討が始まったのは平成18年のことだ。これが結果的に、翌19年に総務省が発表した「公立病院改革ガイドライン」に提示された3つの改革の

柱である「経営効率化」「再編・ネットワーク化」「経営形態の見直し」の内の、「再編・ネットワーク化」による地域医療再生のモデル事業になり得るといことで、両市の協議、構想策定、協定、新病院建設用地の取得への一連の流れが比較的スムーズに進められることになった。

平成21年12月には、当該地域である中東遠地域医療再生計画に対し、地域医療再生基金25億円の交付が内定し（新病院には9.3億円）、それから約3年半の新病院建設工事を経ての開院となったのである。開院当日は、名倉院長の陣頭指揮の下、閉院することになった掛川市立総合病院と袋井市民病院からの入院患者96人の搬送を受け入れた。外来診療初日ということも重なり、同院の“最も長い1日”となった。

それにしても両院の統合から1年ほどでの体制整

静岡県・掛川市・袋井市病院企業団立 中東遠総合医療センター

〒436-8555 静岡県掛川市菖蒲ヶ池1番地の1

<http://www.chutoen-hp.shizuoka.jp/>



備は、迅速かつスムーズに進んだ。これは、同院が開院当初からしっかりした経営計画と部門計画を忠実に実行してきたからに他ならない。今年3月、大会議室で行われた「平成25年度部門別行動計画成果発表会」での概略をまとめた冊子を見ればそのことがよく分かる。

ここでは、事務局、人間ドック・健診センター、地域連携室、医療安全部門、感染対策部門、臨床研究管理室、教育・研修センター、臨床工学室、栄養室、リハビリテーション室、臨床検査室、診療放射線室、薬剤部、看護部の各部門が、開院以来の目標設定、行動計画策定、さらに評価・改善という一連の動きを詳らかにし、同院の基本理念と基本方針に則った以後の目標につなげることになったのである。この発表によって各部門間のそれぞれの仕事に対する理解を促し、風通しを良くさせ、それ以後の病院全体の運営に好影響を及ぼす契機となったことは間違いないだろう。

「断らない救急」を基本に

同院は、掛川、袋井両市を中心に隣接する磐田、菊川、御前崎市および周知郡森町の約47万人規模を診療圏とするが、開院以来、ほぼ1年半という短

い期間にもかかわらず、がん・脳卒中・心筋梗塞・糖尿病の4疾病と救急・へき地・災害・周産期・小児の5事業、さらに回復・精神などの、この地域内における病病連携、病診連携による機能分担はかなり明確なものになっている。ここで目指すのは、まさに地域完結型医療に他ならない。

同院と同規模である隣の磐田市立総合病院（鈴木昌八病院長・500床）とともに地域中核病院として機能しているが、磐田市立総合病院が概ね、がん・周産期・小児・救命救急・災害を中心とした受け皿になるのに対し、中東遠総合医療センターは、脳卒中・心筋梗塞・糖尿病・救急・災害を主な受け皿としている。

磐田市立総合病院と同様、医療における守備範囲は広く、上記のように、地域医療推進のための受け皿区分に基づいて地域医療連携の中核的役割を担いつつ、同院では「断らない救急」を基本的な考えとしている。開院から日が浅いにもかかわらず、地域からの期待感と認知度がことのほか大きいのもこのためだ。

同院は、137,218.53㎡の広大な敷地内のほぼ中央部に延床面積46,151.55㎡、地上8階建ての鉄筋の病院本体が建っている。33の診療科を有する一方、診療科の枠を超えた機能強化を図ることを目的に診療機



新生児観察室

ベビーベッド20台と保育器7台を完備



脳血管内治療センター・心血管内治療センター

24時間365日、迅速な診断・治療が行える体制が整っている。写真は心臓カテーテル治療の様子

259 ちょっと拝見

能のセンター化も進んでいて、救急、ICU・CCU、心血管内治療、脳血管内治療、手術、脊椎・脊髄、内視鏡、血液浄化、睡眠医療、認知症疾患医療、PETの各センターを揃えている。

それぞれにおける最新式の医療機器等の設備の充

実は言うまでもない。3台の血管撮影装置（フィリップス社製）、これに隣接して設置した256列のCT（同）、X線管球を2つ搭載した高性能で超高速のCT（シーメンス社製）、中東遠地域で初導入のPET-CT（同）、イメージガイド放射線治療（IGRT）によ



手術センター
11のオペ室がある。同じ3階にICU・CCU、救急病棟等も隣接



ICU・CCUセンター
1階の救急センターと専用エレベーターで直結。10室ある処置室が、中央のスタッフステーションを囲む形で配置



救急センター 処置室とエントランスから続く庇のある入り口



採光にも工夫した庇がうれしい広いエントランス



薬剤部 12の病棟に薬剤師を配置。外来化学療法室、オペ室にも同行



リハビリテーション室
屋上にリハビリ庭園もある。



後方支援病院とのさらなる連携、在宅診療など、役割を増す地域連携室

静岡県・掛川市・袋井市病院企業団立 中東遠総合医療センター

り不整な形状の小さな病変への照射を可能にする放射線治療装置（エレクタ社製）などがその代表格だ。

同院には現在、医師や看護師をはじめ約1,000人の職員が働いている。中規模病院同士の合併によって大規模病院に転換され、高度医療へ大きく舵を切ったことから、医師の数は研修医を含めて増加傾向にある。看護師においても同様だ。

実際、昨年中に救急医療において救急科医師5名を確保しているし、ICU（10床）、救急病棟（12床）と同じフロアに血管造影室を配置して循環器内科や脳神経外科との連携により、心筋梗塞や脳卒中に対し24時間体制で超急性期の迅速な血管内治療を可能にするなど、実証性の高い動きを展開している。その結果、開院後の心臓および脳への血管内治療は、県内有数の症例実績を誇る。また1年半経った現在、外来患者数は1日平均約1,250人、病床稼働率は約85%だ。

「掛川・袋井モデル」完成に向けて

ハード面においても、地域の期待に十分に答え得る充実ぶりだ。

同院の正面北側に730台を収容できる患者および一般来客用の駐車場、南側に770台の職員および業務用の駐車場がある。北側駐車場脇にはヘリポートも備えられていて、より広域での対応も可能となっている。外来部門は建物の西側部分に配置されていて、駐車場から玄関に連なる屋根付きの広大な車寄せとエントランススペースは、災害時のトリアージに使える場をすることを前提にした設計となっている。建物の東側にあたる救急車侵入路およびその脇の通路や施設からの患者搬送専用の駐車スペースも屋根付きで広い。こうしたスペースに加え、会議室の転用などによって、いざという時には、最大800床の病院として機能する。

同院では、この地域で予測される東海地震発生に備えた建物の免震構造はもちろん、発電機2台の運

転で非常用電力の6割を72時間供給可能な備蓄燃料の確保、3日分の上水の貯留、公共下水道の崩壊に備えた約700㎡の汚水貯留槽の設置、医療ガスの一週間分の確保など、いわば“その時”のライフラインにおける万全の体制を敷いている。

また同院では、費用対効果を踏まえた総合的な環境対策を講じた太陽光エネルギーの利用、屋上緑化、断熱ガラスや高効率照明器具の採用などによって、全国トップクラスのエコホスピタルとしたことも大きな特徴だ。ゴルフ場跡地だったこともあって敷地を取り巻く自然環境も抜群で、療養環境としても申し分ない。

玄関を入ると、大病院の趣を感じさせる開放的なホスピタルモールドが広がる。相当な数の人の動きはあるものの混雑感が感じられないので、来院者にとっては快適だ。病室やデイルームなどは一様に明るく眺望にも恵まれている。

今後は、地域医療のより大きな枠組みの中で、ソフト面において益々高度なクオリティーが求められることになっていくだろう。それにはなんといってもスタッフのモチベーション喚起がカギになる。「当院ではこれから、職員が意欲的に働ける環境づくりと、医師が研修と実績を積むことができる環境を整えていきたい」と名倉院長は語るが、この地域の医療の質は向上・発展していくに違いない。

それに加えて、医療から介護福祉までを見据えた地域中核病院として機能し、同院の医療スタッフのみならず行政や地域住民が積極的に“医療参加”できる環境が整っていけば、自ずと地域包括ケアシステムの構築を目指す全国各地に向けて発信できる「掛川・袋井モデル」が完成することになる。これからの中東遠総合医療センターの動きを注視したい。



名倉英一 企業長兼院長